

コメ 初冬、直播き注目

先月、研修会 農家春の負担軽減

コメ農家の作業が集中する春の負担を軽減し、イネの苗を育てる手間なく、種もみを初冬に田へ直接まく「初冬直播き栽培」が注目を集めている。11月に県内初の大規模な研修会が開かれ、県内外から生産者や関係機関の計約1000人が参加した。農家の高齢化や担い手不足が懸念される中、省力化や経営規模拡大の一助になると期待されている。

初冬直播きは、積雪前の田んぼにイネの種子を播き、土中で越冬させ、翌春に発芽させる栽培方法。春の短期間に集中する耕起から育苗、移植などの作業につき込み限られた労働力を分散でき、従来の稲作と同様、秋に収穫できる。

直播き栽培は、出芽率が低く、苗が育ち始める時期に天候や鳥、雑草などの外的な影響を受けやすい課題があるが、最近では改善されている。採算が確保できる程度に多く種もみを播くと

だまに方法の上野村で
積田の直播き(11月
に直接まき(11月
積田の直播き(11月
に直接まき(11月
積田の直播き(11月
に直接まき(11月



農閑期活用、新たな選択肢

ともに、種を特殊な薬剤で覆って保護し、種をまく深さを調節するといった栽培技術が確立されつつあるためだ。

関川村上野新の上野新農業センターでは、従来の稲作と別に2022年収穫分から初冬直播きを始め、来年収穫分の栽培面積を約1・2畝から約2・4畝に拡大した。

収量は北陸の平均で513キと見込まれるが、同センターは早稲品種のつきあかりをほぼ同量の同510キ520キ収穫できた。

同センターの大島毅彦代表取締役(50)は「比較的手がすいた時期を活用し、新たな選択肢を増やせる」と手応えを感じている。

J Aにいがた岩船は11月17日、同センターなどで研修会を開いた。県内のほか、秋田や福島など県外からも生産者や関係機関の職員らが集まり、機械に積んだ肥料と種もみを田んぼにまく様子を見学し、座学で栽培のコツを聞き取った。

初冬直播きを研究する岩手大学農学部の下野裕之教授は「コメ農家が減少する中、経営の幅を広げ、10、20年先の生産者の力になる可能性を秘めている」と期待感を示した。

※読売新聞令和5年12月6日付
※この記事は読売新聞社の許諾を得て転載しています。
※無断転載・複写を禁じます